

主体的な英語学習者を育成する授業の一考察

—ARCS モデルに基づく実践から—

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科

教職実践専攻 授業力高度化コース

166015 徳田 絵美

主体的な英語学習者を育成する授業の一考察

—ARCSモデルに基づく実践から—

徳田 絵美

授業力高度化コース

要約: 平成29年7月に公示された学習指導要領解説において主体的に学ぶ力の育成が求められた。一方で、外国語教育における課題として、学年が上がるにつれ英語の学習意欲が低下していることが挙げられている。そして、日常生活において英語を話す必要のない生徒たちに、英語を学ぶ意欲を保持させることも課題である。これらの課題を踏まえ、生徒が主体的に学ぶ意欲を喚起するARCSモデルに着目した。本研究では、意欲（やる気）とは何かをモチベーション心理学の観点等から検討し、ARCSモデルの観点から学習意欲はどのような場合に高まるのかを考察した。次に、実習校の生徒の意欲の特性を、アンケートによって分析した。また、実践の振り返りをARCSモデルに基づいて行い、生徒の特性に応じた学習意欲の持続性を焦点化した。その上で、教師が主体的な英語学習者を育成する授業に対し、ARCSモデルからどのようなことが言えるのかを考察した。

キーワード: ARCSモデル、意欲、やる気、有機的統合理論、外国語教育

はじめに

次期学習指導要領（平成29年3月公示）では、子どもたちの知識や理解の質を高め、資質・能力を育む主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点が以下のように示された。

- ① 知識及び技能
- ② 思考力、判断力、表現力等
- ③ 学びに向かう力、人間性等

また、中央教育審議会答申（平成27年12月）では、教師に必要な力として次の点が挙げられている。①教科等を越えたカリキュラム・マネジメント力、②アクティブ・ラーニングの視点から学習・指導方法を改善していく力、③学習評価を改善していく力の3点である。

上記の学びに向かう力とは、主体的に学習に取り組む姿のことであり、「学ぶことに興味や関心を持って、自己のキャリア形成と関連付け、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返り次につなげること」（文部科学省 2017）とされている。さらに、中学校学習

指導要領解説外国語編の目標から、英語学習における主体的な学習者とは、生徒自身が置かれた状況に応じ、外国語によるコミュニケーションの見方・考え方を働かせ、学ぶことの意味と自分自身の生活、人生・社会・世界の在り方を主体的に結びつけることのできる学習者であると読み取ることができる。

一方で、外国語教育の課題として、学年が上がるにつれ英語の学習意欲が低下していることが挙げられている。実際に平成26年度の調査では、小学校高学年の70.9%、中学一年生の61.6%、中学二年生の50.3%が、高校三年生の41.7%の生徒が「英語が好き」と回答しており、中学校で大きく英語学習に対する構えが低下していると言える。その低下の一因に学習意欲の低下が挙げられるとし、ひいてはケラーの学習意欲の喚起モデルが有用だと考え、実習校においてARCSモデルに基づく実践を行った。さらに、学習に対する構えという客観的に測りにくい学習意欲を明らかにするため、鹿毛雅治（2012）が提唱するやる気という複雑な心理現象を様々な角度から分析した、モチベーション心理学に着目した。

そのうえで、実習校の生徒の学習意欲の特性をアンケートをもとに分析する。また、実習校でのARCSモデルに基づく実践の振り返りを通し、生徒の実態に応じた学習意欲を持ち続けることのできる主体的な英語学習者を育成する授業に対し、ARCSモデルからどのようなことが言えるのかを考察することを目的とする。

1. 意欲（やる気）とは何か

1.1 モチベーション心理学におけるやる気について

鹿毛雅治（2012）は、やる気には量と質があり、質は見えにくいと述べている。モチベーション心理学は、見えにくいやる気の質的側面を、以下の4つの視点から可視化する理論である。①何をしようとしているのか、②何をしたいのか、③何をすべきと感じているのか、④何ができると思っているのか。

また、心理学においてやる気とは、行動の生起、維持、方向付けのプロセス全体を意味する、モチベーション（動機づけ）を支えるものとして位置づけている（鹿毛 2012）。ゆえに、やる気はモチベーションを後押しするものであると捉えることができる。よって、本研究ではやる気と意欲を同等のものと捉える。

1.2 学習過程に基づいたARCSモデルにおけるやる気

ARCSモデルとは、J.M.Keller（1984）が提唱した、学習意欲に関する文献をメタ分析し、学

習者の意欲を喚起する 4 つの構成要素及び下位分類を示したモデルである。ゆえに、これらの構成要素から、どのような場合に学習意欲が高まるのかを考察する。4 つの構成要素とは次のものである。

- ①注意（**Attention**）：学習者の関心を獲得する。学ぶ好奇心を刺激する。
- ②関連性（**Relevance**）：学習者の肯定的な態度に働く個人的なニーズやゴールを満たす。
- ③自信（**Confidence**）：学習者が自らの力で成功できること、あるいは成功は自分たちの工夫次第であることを確信・実感するための手助けをする。
- ④満足感（**Satisfaction**）：（内的と外的）報奨によって達成を強化する。

つまり、ARCS モデルの学習過程においてやる気が高まるのは、学習者が関心や注意を向けること、学習者が自身との関係を見出すこと、学習課題の取得や成功に対する期待を持つこと、その期待が満たされる場合である。

1.3 やる気の種類

教職専門実習の中で、やる気が行動や態度に表れやすい生徒や、やる気はあるがそれが表れにくい生徒もいるように感じた。前者を「熱いやる気」、後者を「静かなやる気」とすると、それぞれの生徒の実態を踏まえ、ARCS モデルに基づき、生徒のやる気を見とることは重要な視点だと考えた。そこで、Skinner ら（2009b）が提唱した、学習活動への意欲的な取り組みや関与の在り方を行動、感情、認知的側面から捉えたエンゲージメントという概念を用いた。

エンゲージメントの行動と感情、認知面の要素を熱いやる気と、静かなやる気に分けてみたところ、行動面の要素を分けることは可能であったが、感情面及び認知面の要素には不可分な要素があった。その不可分な要素を分類する手がかりを得るために、生徒のやる気について実習校の教員 5 名（教頭 1 名、教科の教員 3 名、養護教諭 1 名）に半構造化インタビューを 2017 年 12 月に一人当たり 30～60 分行った。各やる気に ARCS のどの段階が有効に働いているか、また強めたらよいのかを考察する手がかりとする。次の表 1 にインタビュー項目を示す。

表 1 教員へのインタビュー項目

質問 1	生徒のやる気にはどのようなものがあるか。
質問 2	生徒のやる気にどのように働きかけているか。
質問 3	静かなやる気をどのように見取っているのか。

今回の教員へのインタビューから明らかになったことは、まず質問 1 に対し、生徒のやる気

は勉強だけでなく多方面に及ぶことである（教頭）。また、やる気をどの生徒も持っているが、思春期のため、やる気を示すことが恥ずかしいという思いや、勉強面に関して自信がなく、失敗したくないという思いが見取りにくいやる気（静かなやる気）の背景にある（養護教諭）等の答えを得た。

そして、質問 2 に対しては、全ての教員から、生徒がお互いに認め合い、素直に自分の思いを伝えることのできる環境や人間関係を日々の学校生活の中でつくることが目指しているという回答を得た。質問 3 に対しては、課題への取り組み方、多様な評価の視点、授業準備の状況、そして 1 対 1 の関わりが挙げられた。そのため、教員は生徒のやる気を授業だけでなく、日々の学校生活全般における生徒の様子の変化や関わりから見取っていることがわかった。

2. 実習校の生徒の英語学習に対する学習意欲の分析

2.1 アンケートの概要

実習校の生徒の英語学習に対する意欲を明らかにするために、英語学習に関するアンケートを作成した。作成したアンケートを、授業を行う前に 2 校（公立 I 中学校と附属 M 中学校）で実施し、中心化傾向を避けるために、各項目に 4 段階（4：とても当てはまる、3：当てはまる、2：あまり当てはまらない、1：当てはまらない）で回答を得た。

表 2 共通のアンケート項目

質問番号	質問項目（英語の授業、学習について）
1	学校の英語の授業は楽しいですか。
2	英語に興味はありますか。
3	将来英語を使う仕事に就きたいですか。
4	将来外国に滞在したいですか。
5	ALT の先生と会話することは楽しいですか。
6	ALT の先生と授業以外でも話しますか。
7	ALT の先生との授業は楽しいですか。
8	ALT の先生が話している英語の内容がわかりますか。
9	先生の英語の指示はわかりますか。

2.2 分析・分類の方法と結果

実習校の生徒の学習意欲を明らかにするために、以下の 2 つの方法をとった。

(1) 方法 1 とその結果

まず、アンケートの回答を用いて以下の 2 つの観点から比較を行った。

[二校間の比較] 学校による生徒の学習意欲の特徴を明らかにするために、2 つの学校の各項目の差を Student's *t*-test を用いて検定した。

[個人の比較] 学校の英語の授業を楽しみ、あるいは英語に興味を抱いている生徒と、あまり興味を抱いていない生徒とを比べ、どの項目において高い回答をしているのかを、相関係数(= *r*)を求めることにより比較した。

方法 1 の結果を以下に記述する。

[二校間の比較]

二校間の英語学習意欲に有意差が見られたアンケート項目の平均値を図 1 に示す。

項目 1 では、M 中学校の方が有意に高かった ($p < 0.01$)。一方で、項目 5~7 では M 中学校より、I 中学校の方が有意に高かった (項目 5, 6: $p < 0.01$, 項目 7: $p < 0.05$)。

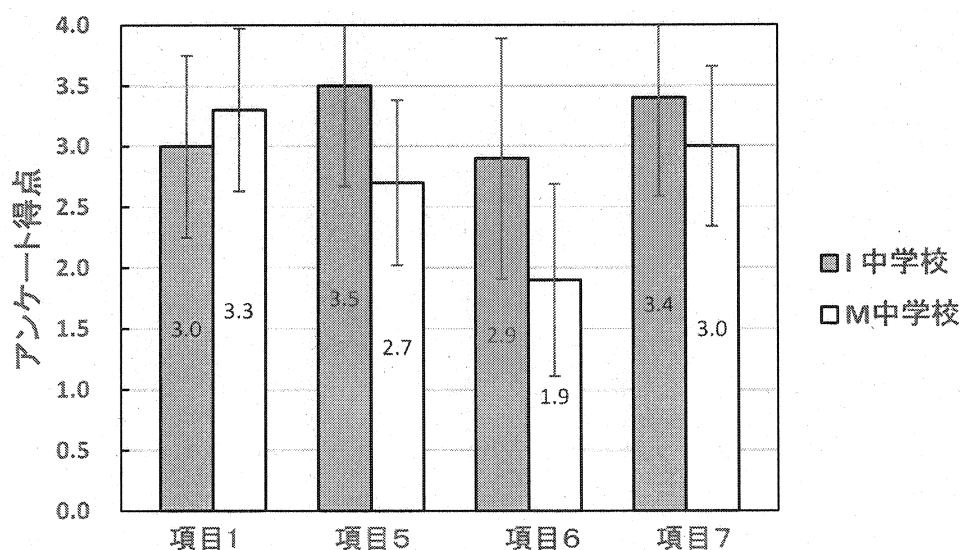


図 1 英語学習アンケート結果

* グラフの中の線は分散を表す

項目 1 は英語の授業に関する項目であるが、I 中学校は公立学校、M 中学校は附属学校であるため、生徒の実態の差が関係すると思われる。

項目 5~7 は ALT に関する項目であるが、I 中学校の ALT は授業以外の場面でも生徒と積極的に関わろうとしていた。この姿勢が生徒と信頼関係を形成し、生徒の英語学習に対する意欲に影響を与えていると考えられる。つまり、I 中学校は ALT を有効に活用できていると言える。

さらに、I 中学校は、項目 5~7 で M 中学校より回答の分散が大きかった。このことから、ALT

との関わりに、積極的な生徒とそうでない生徒が混在していることがわかる。

[個人の比較]

アンケートで項目 2 と相関のあった項目及び、その相関係数を表 2 に示す。項目 2 を取り上げた理由は、英語に興味のある生徒はどの項目において高い回答をしているかを明らかにするためである。項目 2 と 1,9 では強い正の相関が認められ、項目 2 と項目 3,4,5,8 では中程度の正の相関が認められた。

表 3 アンケートで項目 2 と相関のあった項目

	項目 1	項目 3	項目 4	項目 5	項目 8	項目 9
相関係数	0.70	0.63	0.54	0.58	0.65	0.74
相関の強さ	強	中	中	中	中	強

(相関の強さは、 $r \geq 0.7$: 強, $0.5 \leq r < 0.7$: 中, $r < 0.5$: 弱 とした。)

表 2 から、以下の 6 つの傾向があると考えられる。

- ① 英語に興味のある生徒は、英語の授業を楽しんでいる。
- ② 英語に興味のある生徒は、将来英語を使う仕事に就きたいと考えている。
- ③ 英語に興味のある生徒は、将来外国に滞在したいと思っている。
- ④ 英語に興味のある生徒は、ALT との会話を楽しんでいる。
- ⑤ 英語に興味のある生徒は、ALT と教員の英語の発話内容を理解している。
- ⑥ 特に⑤は興味と英語力（外国語表現の理解）に関係性がある。

(2) 方法 2 とその結果

アンケート項目の「何のために英語を学んでいますか」という記述項目に対する回答を、自己決定理論の中の外発的動機づけを自律性の高さによって、統合的調整、同一化的調整、取り入れ調整、外的調整の 4 つの段階に分類する有機的統合理論（櫻井 2009）と、学習活動を対象にした実証研究（西村ほか 2011）から、図 1 のような 3 つの群に再構成し、生徒の記述を分析した。櫻井(2012)は、「自己決定理論とは人間のモチベーションに関する基本的な理論で、学ぶこと、働くことなど多くの活動において自己決定すること（自律的であること）が高いパフォーマンスや精神的な健康をもたらすとする理論である。」と述べている。外発的動機づけとは報酬を求める、あるいは罰を避けるために行動する、賞罰に基づくモチベーションである。西村らの実証研究では、最も自律性の高い外発的動機づけである統合的調整を、内発的動機づけとともに、行為自体を目的にする内的調整としているが、実習校の生徒の記述にはそれ

に類する記述がなかった。そのため、なぜ英語を勉強しているかという質問に対し、「将来のため」や「・・・した時のため」など、活動を行う価値を認め、自分のものと受け入れている状態の同一化的調整までを「やりたい群」に分類した。次に「英語ができないと恥ずかしいから」などの罰や恥の回避などに基づく、取り入乐的調整及び外的調整を「やらされ群」に分類し、「わからない」と答えている、何にも動機づけられていない状態の生徒を「悩み群」として分類した。

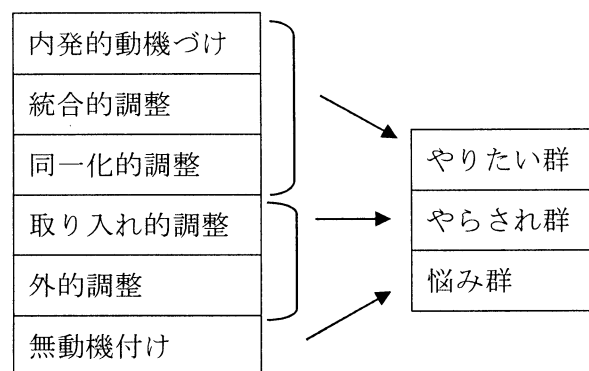


図2 アンケートを分類するための枠組み

方法2の結果を以下に記述する。

最も自律性の高い動機付け（内発的動機づけ）、例えば、「・・・することは楽しい」という行為自体を楽しんでいる生徒は、中学二年生の四月の段階では見られなかった。しかし、自身の将来と英語学習を結びつけ、英語学習に意欲を示している生徒は90%以上を占めた。

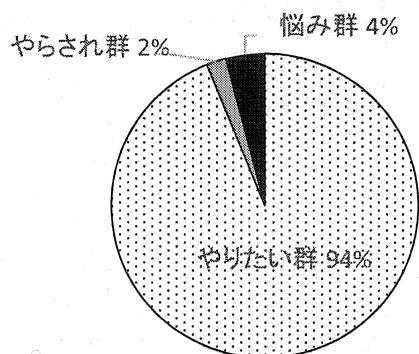


図3 英語学習意欲の分析結果

4. ARCS モデルに基づく実践

4.1 ARCS モデルに基づく実践・分析

前章までの実習校の生徒の学習意欲の特性を踏まえ、筆者は以下の計画でARCSモデルに基づく授業実践を行った。本章では第二時と第三時を実践2、実践3とし詳しく述べる。

教材：『NEW HORIZON English Course 2』 Unit2 Part2 Dialog

単元計画：第一時 新出文法の導入（show O₁ O₂）

第二時 オリジナル Dialog 練習

第三時 オリジナル Dialog 発表

(1) 実践 2

実践 2 に取り入れた ARCS の視点は表 4 の通りである。また、その授業に対する生徒のコメントを表 5 に示す

表 4 実践 2 の授業デザイン

授業過程	活動内容
	取り入れた ARCS の視点
Warming up	Study Gide の提示、リスニング、New words、Bingo、疑問マスター
	Relevance 生徒が自身の将来と本時の学びを関連づけられるよう目標設定した。
Introduction	本文のリスニング及び Q&A、モデルの Listen & Repeat
Activity	ペアでの本文の対話練習
Introduction 2	パスポートに関するクイズ、本文以外での入国審査での受け答えの導入
	Attention 入国ゲートでの会話を取り上げた場面であるため、生徒の注意を喚起するために、筆者と ALT のパスポートを提示し、パスポート形式のワークシートを用いた。
Activity 2	ペアでのオリジナルの Dialog 作成と練習
	Confidence 生徒が自信をもって発表を行えるよう、筆者と ALT のモデルと発表のポイントを示し、オリジナル Dialog の作成と練習に十分な時間を確保した。
Summary	数ペアによる本時の練習の成果の発表、次時の予告

表 5 実践 2 に対する生徒のコメント

生徒	生徒の授業コメント
生徒 A	韓国行くから、パスポートの時、英語頑張ろう！
生徒 B	入国審査って、疑問詞たくさん出てくるんですね！
生徒 C	I'm not Bingo!!
生徒 D	面白かったし、久しぶりだった。

生徒 E	ビンゴのやつわかりました。
生徒 F	何回かやったらいろいろできるようになった。
生徒 G	入国審査は難しそうだと思った。
生徒 H	今日当たる方がよかった。

この結果から、次のことが言える。まず、実習校の生徒は自身の将来と英語学習を結びつけ、英語学習に意欲を示している生徒が多い。そこで、本時は教科書の内容理解を深めるために、パスポートや入国審査で尋ねられる他の表現とその受け答えを紹介し、教科書の内容を生徒の将来に引き寄せた。そのため、生徒 A のコメントに見られるように、自分自身と授業の内容との関連を見出したと考えられる (Relevance)。そして、入国審査の表現の中で既習事項である疑問詞を強調したため、生徒 B のコメントに見られるように、既習事項と本時の学びと関連づけることができたと考えられる (Relevance)。

生徒 C は、授業中での英単語のビンゴゲームにより、学習活動を楽しんでいる。これは、ARCS モデルの Relevance (動機との一致) に当てはまる (稲垣・鈴木, 2015, p.115)。生徒 D は、生徒を実物のパスポートに触れさせたことで、注意を喚起されたと思われる (Attention)。生徒 E は悩み群の生徒であるが、前時に読み方のわからなかった単語の読みがわかったため、一歩ずつ自身の成長を実感している (Confidence)。また、生徒 F、G のコメントから、個人によって必要な練習時間が異なることや課題に対する感じ方が異なっている。そのため、すべての生徒に同じ課題を同じ時間で行うことで Confidence を高めることは難しいとわかる。

次に、熱いやる気と静かなやる気の観点からは、次のことが言える。生徒 H のコメントのように熱いやる気をもつ生徒には、その時間の思いや成果を発表する場を与えることの必要性がある。それにより Satisfaction を強化することができるためである。

以上の分析から、生徒 A、B はやりたい群の生徒であり、Relevance が有効であると言える。生徒 C は静かなやる気を持った生徒であり、Relevance が有効である。生徒 E は悩み群の生徒であり、Confidence を高めることが有効であると言える。また、生徒 D、G は熱いやる気を持つ生徒であり、Attention と Satisfaction の強化を考える必要がある。

(2) 実践 3

表 6 に実践 3 に取り入れた ARCS の視点を示す。次に表 7 に、実践 3 のコメントシート返却時の生徒の発言例を記す。

表 6 実践 3 の授業デザイン

授業過程	活動内容
	取り入れた ARCS の視点
Waring up	Study Gide の提示、Listening
Review	Repeat 発表のポイントの提示、練習
Presentation	Dialog 発表、コメントシートへの記入、フィードバック
	Satisfaction 生徒が発表を行ってよかった、またやりたいと思えるように授業者と教員からの積極的なフィードバックを行った。また、生徒同士のフィードバックも生徒の満足感に大きな影響を与えるであろうと考え、発表しているペアに対し、生徒にコメントを記入させ、後日返却した。
Summary	全教師からのフィードバック、次時の予告

表 7 実践 3 のコメントシート返却時の生徒の発言例

生徒	生徒の発言
生徒 I	思ってたよりも、いいこと書いてある。
生徒 J	あ〜、声の大きさか。
生徒 K	そんなに言うの速かったかな〜。
生徒 L	これ誰が書いたんやろう。

実践 3 では、入国審査の表現を復習し、練習する時間と発表する時間を設けた。なぜならば、実践 2 では、自信を感じている生徒が少なかったことや、活動を「やってよかった」と生徒が満足することのできる時間を設けることができなかったからである。実践 3 の考察をコメントシート返却時の生徒の発言例から考察する。

熱いやる気と静かなやる気の観点からは、次のことが言える。まず、生徒 I のように、静かなやる気を持つ生徒にとって、自分の頑張りが目に見える形になると考え、Confidence と Satisfaction を高めたと言える。生徒 J、K も静かなやる気を持つ生徒であり、コメントシートは本時の発表を振り返り、次の発表へとつなぐ梯子として機能している (Confidence)。また、Satisfaction の視点として取り入れたコメントシートであったが、同時に Confidence の役割も果たしていると考えられる。

課題としては、生徒 L の発言に見られるように、どのような内容のコメントであっても、生

徒にそのままフィードバックとして返すべきか、内容により、教師が修正する必要があるのかを検討する必要がある。

5. 考察と今後の展望

5.1 主体的な英語学習者を育成する授業について

生徒のレディネスを考慮するだけでなく、生徒が持っている意欲の特性を把握することが必要である。また、やる気は教員の働きかけや学校生活全般の影響を受け、様々な要因によって変化するものである。それゆえ、アンケートによる調査だけではなく、生徒との日々のかかわりから生徒のやる気の変化を見とる必要があるといえる。また、教育活動全体を通し、生徒が主体的に物事に取り組むことのできる環境づくりが必要であるといえる。

本研究から、生徒のやる気について ARCS モデルの関連から以下のことが言える。まず、やりたい群の生徒には **Relevance**、悩み群の生徒には、**Confidence** が有効であると考えられる。

また、静かなやる気の生徒に対しては、**Relevance** と **Confidence**、**Satisfaction** が有効である。熱いやる気の生徒には、**Attention** と **Satisfaction** が有効であると考えられる。

そのため、生徒のやる気やその教科を学ぶ目的に沿うものや、教師が新たに生徒に気付いてほしいものを ARCS モデルに基づいて、授業に組み込むことで、生徒の主体的な学びを引き出すことができると思われる。また、主体的な英語学習者を育成するためには、教師の働きかけのみならず、生徒同士の働きかけが大きな影響を与ええると言える。

5.2 今後の展望

まず1点目は、生徒のやる気の特徴の把握についてである。今回は筆者が実施したアンケートの記述回答を「やりたい群」、「やらされ群」、「悩み群」の3つに分類した。その中で、「やりたい群」に「将来のため」という回答を分類した。しかし、英語科は教科の特性上、「将来のため」と回答しやすい教科である。そのため、「将来のために具体的にどのように役立つと考えているのか」を明らかにすることで、同一化調整としてのデータの信頼性が向上すると思われる。

2点目として、「なぜ英語を勉強しているのか」という質問に対し、「英語ができないと恥ずかしいから」などの回答を「やらされ群」、「わからない」という回答を「悩み群」と分類したが、「わからない」と回答した生徒が英語の授業をどのようにとらえているかを明らかにすることで、「やらされ群」と「やりたい群」の違いをさらに明確にできると考えられる。

3 点目は、ARCS モデルに基づく実践についてである。今回の ARCS モデルに基づく実践は Unit2 Part2 のみの実践であったため、ARCS のどの段階がどのようなやる気を持った生徒に有効かを検証するには不十分である。ARCS モデルを取り入れた授業をさらに実践し、ARCS の各段階がどのようなやる気を持つ生徒に有効かをさらに検証していく必要がある。また、長期的な実践を行い、生徒のやる気や学習への取り組み方の変化を見ていく必要がある。

引用・参考文献

- ・ 稲垣忠, 鈴木克明編 (2015) 『授業設計マニュアル Ver.2 ―教師のためのインストラクショナルデザイン―』 北大路書房
- ・ 鹿毛雅治 (2012) 『モチベーションを学ぶ 12 の心理学 - ゼロからわかる「やる気」の心理学入門』 金剛出版
- ・ 西村多久磨, 河村茂雄, 櫻井茂男 (2011) 「自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス-内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか?」『教育心理学研究』第 59 巻 1 号, pp.77-78.
- ・ 文部科学省 (2017) 中学校外国語学習指導要領解説 外国語編
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387018_10_1.pdf
(最終閲覧日 2017 年 11 月 30 日)
- ・ 文部科学省, 中央教育審議会答申(2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf
(最終閲覧日 2017 年 10 月 30 日)
- ・ 文部科学省 (2015) 教育課程企画特別部会 論点整理補足資料 (3) 6. 各教科における具体的な方向性
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110_2_3_1.pdf
(最終閲覧日 2017 年 10 月 15 日)
- ・ J.M.Keller 著, 鈴木克明監訳 (2010) 『学習意欲をデザインする ―ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン―』 北大路書房
- ・ Skinner, E.A., Kindermann, T.A., Connell, J.P. & Wellborn, J.G., 2009, Engagement and disaffection as organizational constructs in the dynamics of motivational development. In : K.R. Wentzel & A. Wigfield (Eds.) Handbook of Motivation at school. New York : Routledge.